

# ブリーフィング・メモ

## ロシア機動演習「ヴォストーク 2018」

地域研究部米欧ロシア研究室主任研究官 山添 博史

ロシアは4つの統合軍管区をもち、4年で一周するサイクルで順に各軍管区を舞台とした大型の戦略級軍事演習を行っている。東部軍管区における「ヴォストーク」演習は、2010年、2014年に続き今年2018年の実施となった。9月11日～17日の日程で実施された「ヴォストーク 2018」機動演習は、1981年以来の最大の兵員動員規模、中国軍の参加、ウラジオストクにおける東方経済フォーラムや首脳会談と同時期と発表されたことで注目を集めた。しかし、これを日本に対する問題としてどの程度のものと評価するかは、ある程度文脈を追って考える必要があるだろう。本稿では、まず政治的メッセージとしての意味合いを考え、続いて、東部軍管区におけるロシアの軍事建設の文脈における理解を試みる。

### 1. 政治的メッセージ：防衛意思、中国との連携、限定された敵意表明

ロシアは2014年以来、欧米諸国との対立構造が固定化し、あえて関係悪化を厭わないような強硬なメッセージ発出や行動を行ってきた。それでも2018年5月、4回目の大統領任期の開始にあたってプーチン大統領が発した大統領令には、2012年と異なって軍事問題の強調はなかった。また2015年頃に比べると、近年は国防費の抑制を図る方向性にある。このため、ロシアは軍事強硬路線をとらないと解釈する余地も大きくなっているが、ロシアとしてはあえてこの時期に、1981年以来の最大の兵力動員で人員30万人、航空機1,000機、艦艇80隻、戦闘車両36,000両と宣伝した。これは、当局が強い軍事力を誇れるロシアを維持すると国民に示すとともに、対外的にもロシアが軍事の備えに力を入れていることを示し、ロシアを軽んじるべきではないと主張する意図があるものと思われる。

そして警告メッセージとして重要なのは、ロシアの軍管区規模の演習に初めて3,500人の中国人民解放軍が参加したことである。2013年7月にウラジオストク周辺で中露海上合同演習が行われた際には、その直後にロシア軍が「抜き打ち検閲」と呼ばれる演習を実施し（人員16万人、戦闘車両5,000両、艦艇70隻と発表）、プーチン大統領がモンゴル・中国国境に近いツゴル演習場を視察した。当時筆者は、ロシアは中国との協調を保ちながらも、最も多くの地上軍旅団を東部軍管区に配して、中国との陸上衝突の可能性に備えていると解釈した。しかし2014年にロシアと欧米諸国の関係が悪化してからは、ロシアが中国に接近する度合いが進み、Su-35戦闘機やS-400地对空ミサイルシステムなど比較的進んだ兵器を輸出する作業も進んだ。「ヴォストーク 2018」でも、中国軍は2013年と同じツゴル演習場でロシア軍と並んで演習を行い、シリアでの非対称作戦や爆撃機の経験を学

んだとされており、相互依存関係を深めている実態が見られた。ロシアはいずれ中国と衝突せざるを得ないとの見解は広く見られるが、仮にそうだとした場合も当分はロシア・中国が敵対関係になることはない、あるいはロシアを中国から引き離すには相当の代償が必要だということを示したいのだろう。

それでは、ロシアは中国とほとんど同盟の関係に入り、日米同盟と衝突する姿勢を示しているのだろうか。同時期に開催されていた東方経済フォーラムにおいて、司会者が日露平和条約と日米同盟の問題をふったのに対し、プーチン大統領はミサイル防衛の問題点に触れ、領土問題より前に平和条約締結に進む考えに言及してニュースづくりを主導した。しかし米軍が脅威であるとか、日米同盟のせいで島は引き渡せないといった論点は持ち出さなかった。もし習近平国家主席や安倍総理との経済協力を話すこの場でそのような発言を行い、さらに同時期に北方四島で軍事演習を行うのであれば、中露対日米の対決姿勢は明らかとなる。そのかわり、安倍政権のロシア外交の推進力は失われ、ロシアが求めるような日本との協力関係もつぶれてしまっただろう。

このように、ロシアはいざとなれば戦える備えを示し、中国とも連携するが、直ちに日米と対決するというわけではないというメッセージを発している。そもそも、2017年のトランプ大統領の登場以来、英国におけるスクリパリ氏毒殺未遂事件や世論工作疑惑などをめぐって欧米諸国はロシアに厳しい姿勢を示し、制裁も強化したが、ロシアは軍事挑発や対決的言辞を最大限には用いていない。ロシアにとって、あえて事態を悪化させる時機ではないとの判断であろう。

## 2. ロシアの軍事建設：陸上防衛とオホーツク海防衛

しかしながら、ロシアは軍事的な備えは、限られた資源消費のなかでも続けている。その能力の向上は、危機が発生した際にロシアに選択肢を与え、対する国々の打つ手を縛るものである。例えば、仮にバルト海西部において何らかの紛争が起こる場合に、ロシアの持つミサイルや艦艇、航空機等の能力により、NATOの支援兵力投入が大きく妨害されることが予想されることは、NATOの集団防衛の根本的な問題であり続けている。その意味で、将来起こりうる危機の際に、ロシア軍がどのような能力を持ちつつあるかは、注目しておく必要がある。

「ヴォストーク2018」をめぐる話題の多くは、陸上における大規模動員であった。しかし、兵力規模よりも、多様な部隊を素早く指揮統制する能力の向上に注目すべきである。2017年にはロシア西部軍管区とベラルーシにおいて「ザーパド2017」軍事演習があり、彼らは合計12,700人と称していたが、多くのニュース記事は実際にはそれより大きな兵力を動員したであろうと観測していた。しかし、英国チャタムハウスのプレグ研究員は、大規模兵力の運用はその4年前の「ザーパド2013」演習ですでに実施しており、「ザーパド2017」はそれほど大規模でない部隊を素早く指揮統制することに重点があったと指摘した。

同様に、「ヴォストーク2018」についても、兵力のみならず部隊運用能力に注目するべ

きであろう。確かに、ウィーン文書による兵力制約（13,000人を超える場合オブザーバーが自由に視察することを受け入れるのが義務となる）がある欧州方面と異なり、ウラル山脈以東でロシアはそれに拘束されずに大兵力を用いた軍事演習を行うことができる。このため、有事には欧州方面で運用するような大兵力を東部軍管区で演習するという意義もあったかもしれない。それに加えて注目されるのは、陸上では戦闘車両や歩兵のみならず、ヘリコプター、空挺部隊、地対空ミサイル、爆撃機など多軍種の訓練を統合指揮していたことである。やはり、かつてのような大戦争モデルから、多軍種統合による現代戦へのシフトにロシア軍が向かい続けていることが見受けられる。

また、「ヴォストーク2018」は海上部隊の行動も指揮しており、多くの場面で迅速に行動する能力を検証していた。実際、ロシアにとって極東や北極の海上防衛は、2012年にプーチン大統領が復帰した際にも特に挙げられた優先課題であった。ロシア軍にとって、主要な正面が欧州やカフカス山脈だとしても、外敵との軍事紛争がエスカレートした場合、脆弱な地域が狙われる可能性に備える必要があるという論理が成り立つ。北極や極東は、2000年代まで優先度が低く、1990年代に廃れたままの遅れた状態を引きずっていた。2012年から強化してきた北極や極東の防衛は、そのような文脈で回復する途上にある。

4年前の「ヴォストーク2014」演習（人員15万5,000人、戦闘機・艦艇等8,000と発表）は、オホーツク海周辺と北極海地域を連続する防衛正面とする考え方を示すものとなった。直前の「抜き打ち検閲」で大陸部に駐屯する部隊を東や北の周縁地に移動させ、「ヴォストーク2014」演習において実弾演習を行った。オホーツク海は、カムチャツカ半島のペトロパヴロフスクで更新されたボレイ級弾道ミサイル発射原子力潜水艦2隻（のちに2隻追加予定）が行動し、本土が攻撃を受けても残存し反撃する「第二撃」戦略核戦力の重要拠点とされている。このため太平洋の出入り口となる「クリル諸島」（日本政府のいう北方四島と千島列島を合わせたロシア側呼称）も防衛線に含まれている。2016年8月にショイグ国防相は、この海域に「沿岸防衛システム」を構築する計画があると表明し、オホーツク海やベーリング海峡の通航の安全を保障することにより、戦略核戦力を確保すると明確に述べた。

その前後のロシア軍の措置も、そのような構想を実現していくプロセスに見受けられる。「クリル諸島」の中ほどにあらたな拠点を構築するとして、ロシア軍はマトゥア島の調査を行い、現在は同島に滑走路を設置したほか、北部のパラムシル島にも拠点を設置するもようである。2010年頃から北方四島へのミサイル配備の構想が報じられてきたが、ついに2016年11月、国後島にバル、択捉島にバスチオンという対艦ミサイルのセットが導入されたと報じられた。2017年2月、ロシア国防省は「沿岸防衛システム」の一環として、「クリル諸島」に師団を編成すると発表した。2017年7月、太平洋艦隊の新規水上艦艇としては冷戦後初めて、ステレグチシイ級フリゲートのソヴェルシェンヌイがウラジオストクに配備されており、引き続き新型艦4隻やミサイルが導入される予定である。

さて、2018年9月11～17日の「ヴォストーク2018」は、オホーツク海北部での海

上行動を含んでいたが、「ヴォストーク 2014」と異なり北方四島での実施はなかった。「沿岸防衛システム」の具体像についても表明されることはなく、海上での最大限の事態に対応する軍事演習には見受けられない。

ただし、日本の立場とは相いれない、北方四島を含む軍事演習は、2018 年にも 3 月に Su-35 戦闘機の飛来、6 月に対艦ミサイルの実射などが報じられている。戦闘機部隊の主力はなお大陸に留まるとしても、択捉島の飛行場を用いて運用するようになっており、以前と比較しても手放しがたいアセットになったのも事実だろう。また 8 月にもオホーツク海で比較的大規模な艦艇の行動があり、9 月 3 日には 28 隻のロシア艦艇がその帰路として津軽海峡を通過したと統合幕僚監部が発表している。

このように、「ヴォストーク 2018」演習は日本周辺海域の最大の防衛作戦を行うものではなかったが、その一部ではあり、ロシア軍が引き続き、オホーツク海からベーリング海峡にかけての軍事力を増強し演習する意向であることに注目しておきたい。

### 3. ロシアにとっての現段階と今後の留意点

このように、機動演習「ヴォストーク 2018」は、強大な軍事力を重視するという政治的メッセージに加えて、統合運用における指揮統制能力、海上防衛体制といった具体的な軍事力の向上も目指したものとなっている。これをただちに、露中が日米欧と大兵力で戦う準備をしていると受け取るよりは、現状では敵対姿勢は限られたものであること、この演習に限らない海上防衛構想などの軍事目標があることも注意しておきたい。また、ウクライナやバルト海周辺で指摘されるような、ロシアの小規模部隊や非軍事手段による非対称な作戦の能力が、実際には難しい問題となっている。日本周辺においても、ロシアの意図と能力の変化を注視し続ける必要があるだろう。

#### 参考文献

- Mathieu Boulègue, “Five Things to Know About the Zapad-2017 Military Exercise,” Chatham House, 25 September 2017
- Mathieu Boulègue, “Russia’s Vostok Exercises Were Both Serious Planning and a Show,” Chatham House, 17 September 2018
- Johan Norberg, “Vostok-2018: about the Russian military’s brain, not its muscles,” RUFBS Briefing No. 43, FOI (Swedish Defence Research Agency), 20 September 2018

(2018 年 10 月 5 日脱稿)

本稿の見解は、防衛研究所を代表するものではありません。無断転載・引用はお断り致します。  
ブリーフィング・メモに関するご意見・ご質問等は、防衛研究所企画部企画調整課までお寄せ下さい。  
防衛研究所企画部企画調整課

外 線 : 03-3260-3011

専用線 : 8-6-29171

FAX : 03-3260-3034

防衛研究所ウェブサイト : <http://www.nids.mod.go.jp/>